

浄土 monthly JODO

2023 October
vol.89
no.977

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
発行所 法然上人顕仰会
発行日 令和5年5月30日 発行部数 4,000部

法 然 上 人 顕 仰 会

令和5年

通巻977号

浄土

時

寺院紀行

ブラジル・パラナ州 クリチバ日伯寺 真山 剛

ぶつぶつ放談

日蓮宗を知ろう 高松孝行 灘上智生

近現代浄土宗史

廃仏毀釈とは何だったのか 吉田淳雄

法然上人顕仰会

浄土

2023/10月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 ブラジル・パラナ州 クリチバ日伯寺	
..... 真山 剛	1
寺院紀行 ブラジル・パラナ州 クリチバ日伯寺	6
..... 真山 剛	6
ぶつぶつ放談 他宗を知ろう「日蓮宗」その1	
..... 高松孝行 灘上智生	12
近現代浄土宗史 第2回 廃仏毀釈	20
..... 吉田淳雄	20
『選択本願念仏集』講義余話4回 しるしなくば	28
..... 阿満利麿	28
寺々刻々⑭ 日本人の弔いのカタチ	32
..... 鶴飼秀徳	32
みんなの境内 浄土宗芸術家協会の歴史をたどる	36
..... 赤坂明翔	36
林海庵・開教奮闘記⑬ 国際開教(一)	38
..... 笠原泰淳	38
漫画「浄土宗のお祖師様」四祖良暁上人 第2回	43
..... ぐんじまん	43
あなたもお寺のCIO⑰ 寺院IT化の見えない足枷	46
..... 小路竜嗣	46
微風吹動 「生活のなかの仏教」とお念仏	50
..... 名和清隆	50
おススメ仏教書 『須弥山と極楽—仏教の宇宙観』ほか	
..... 原口弘之	54
編集後記	56
心に響く言葉⑥	表2
..... 長谷川岱潤	表2



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=貞林院瑞正寺二十五世 林錦洞「般」金文文字

アートディレクション=近藤十四郎

国際開教(一)

開教奮闘記

林海庵開山上人

笠原泰淳



かさはら たいじゆん

昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。日本通運(株)に入社、八年勤務し浄土宗東京教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十年勤務。平成十四年「林海庵」を設立。翌年、同寺が浄土宗寺院として承認され住職となる。現在、浄土宗開教振興協会副理事長。

これまで書かせて頂いたように、林海庵の国内開教寺院としての歩みは四段階のステップを踏んだ。すなわち、

第一段階 檀信徒コミュニティの形成

第二段階 土地建物の取得

第三段階 宗教法人の設立

第四段階 法人名義による墓地の確保

である。第四段階——林海庵の共同墓が完成し、これでひと段落。あとは日々の寺院活動を粛々と続けてゆくことになる。

月例の「楽しいお念仏の会」は令和二年、コロナ禍の中で通算第二百零目を迎えた。延べ参加人数は三六四一名。ウイズコロナ時代の現在は、開催については感染者数の様子を見ながらその都度判断している。写経会も同様である。

コロナ禍になってからは本堂の扉を開放し、いつでも外からお参りできるようにしている。地域の人々に祈りの場を提供しなければならぬ。そ

の思いからである。

手を合わせる心、そしてお念仏の声。小庵での地味な活動ではあるが、これらを伝え続けてゆきたい。

さて、今回から皆さまにお付き合い頂きたいのは「国際開教」の話である。

平成二十六年から、インターネットを通じて海外の方々に浄土宗の教えを紹介している。国内開教の活動がひと段落したのを機に、懸案であった海外向けの開教活動を開始したのだ。

これまで国内開教の体験談について書いてきたが、そもそも浄土宗の開教は国内ではなく海外から始まっている。明治時代の海外移民政策がそのきっかけである。

江戸時代中期から後期にかけて、日本の人口は三千万人くらいであったと言われていた。明治時

代に入ってから人口が増え始め、明治四十五年には五千万人を超えた。工業化が進んではいたもののまだ十分ではなく、人口過剰の状態であった。政府はその対策として海外移民を奨励する。だが、夢を胸に抱いて海外に渡った人々を待ち受けた現実には、決して甘いものではなかったという。住み慣れない土地での厳しい労働、低い社会的地位、言語の問題——娯楽も少ない中で飲酒や賭博に走る人も少なくなかったという。人々の心の支えとなるようなものが必要とされる中で、宗教界の関心が海外に向く。

以下は、この度のマウイ島ラハイナの大火で世界的に注目を集めることとなったハワイの例である。『浄土教報』明治二十六年八月号の社説にはこうある。少し長いが一部引用する。（『浄土宗布教伝道史』浄土宗、平成五年より）

「……この島に住む日本人移住者の数は、総人口

の約四分の一を占めるほどであり、日本の海外移住民の多さは第一である。ところが、このように多くの移住民がいるにもかかわらず、日本の仏教家のハワイに対する関心は薄く、熱心に布教活動をする僧侶がいない。現在、真宗の僧侶が一人いるが、充分な人望がなく、このままではハワイにいる二万人近い移住出稼ぎ者は、佛陀の法雨に潤うことを得ず、宗教上の浮浪の民になってしまうであろう。（中略）

この事態を誰も顧みる者がいないなら、移住民は異教徒になってしまい、大和民族の特色を失ってしまふであろう。そして、道徳の素養を持たない人間に成り下がり、酒に溺れ、賭博を好むようになり、折角働いて得た金銭もまるで一夜の夢と化すように浪費し、やがて放蕩者や無頼の徒も増えるであろう。このことは、彼らが自分の身を害するばかりでなく、ひいては世界に対して日本の国辱を招くことになる。

このような現状を見つめるとき、今、世界に移住した出稼ぎ者のために、熱心な慈悲心をもった仏教家が進んで海外布教に出ることがもとめられている。その手始めとして、ハワイの移住民の教化を志す人材を求めろ。」

長文なので一部省略した。だがその熱い思いは充分に伝わってくる。

この呼びかけに応えてハワイ開教の先鞭をつけたのが、松尾諦定師であつた。

こうしてハワイ開教を嚆矢として、台湾・朝鮮・樺太・満州・北米・南米等へと海外開教が広がっていった。海外開教と日本のナショナルリズムの関連については注意を払う必要がある（前掲の文章にも「大和民族」という言葉が見える）が、法然上人のお念仏の教えが初めて海外に広がっていったことは重要なポイントだと思う。

宗祖八百年大遠忌を記念してハワイ開教区から

出版されたのが『OTSUTOME（おつとめ）』というハードカバーの本だ。日本語・ローマ字読み・英訳が併記された画期的なもので、英語圏の信者からも高く評価されている。この本も、開教現場における先達の努力の結実であるといえよう。

国内開教に取り組む以前、私はハワイの開教使を目指そうと考えていた時期がある。勤めておられた開教使が一人帰国されるので、その代わりにハワイに行かないか、という話があつたのだ。そこで一週間休暇を頂いて、ハワイの各寺院にお邪魔して見学させて頂いた。

感触としては、残念ながら「自分には無理だろう」というのものであつた。英語に自信がなかったのもさることながら、アメリカ人にお念仏を伝える力には自分にはないと思つた。

当時、ハワイ開教区の総監を務めておられたのは故榎柴裕文師。親しくお話を聞かせて頂いた。

「これからは、日系人の檀信徒だけを相手に活動している時代ではありません。日系人以外のアメリカ人にも布教しなければ。」

日系三世以降の人たちは日本語を話す人も少なくなってきた。四世五世ともなれば完全にアメリカ人なのです。これまでのやりかたではハワイのお寺は続きません。

でも、古くからハワイのお寺を支えて下さってきた日系人の方々は、私たちが新しい方向を目指すのをあまり歓迎しないのです。」

だが、実際にハワイの土を踏んでみると、例えば初対面のアメリカ人の高校生に、「さあ、お念仏を称えましょう。」

とはなかなか言えない。それが実感だった。これが日本国内であれば、檀信徒のお子さんに、「一緒に『なむあみだぶ』と称えて下さいね。」と言える。日本の歴史や文化を共有していない外国の人たちに、お念仏を勧める仕事は自分にはできない――

このように思ったのだ。

ハワイの開教使に応募するのは断念した。だが、先の檣柴師のお話は強く私の胸に刺さっていた。

国内開教に取り組んでいる間は、目先のことに追われてきた。だがお寺が少し落ち着いてくると、私の中で外国人向けの布教に対する関心が高まってきたのである。



RINKAIANの国際布教はオンラインで始まった。法然上人の十念を英語で説明する